

[報告] 北但馬地震からの復興とまちづくり

(第 32 回歴史地震研究会公開講演会要旨)

前豊岡市教育委員会* 松井 敬代

§ 1. 震災前の豊岡町と城崎町

当時の豊岡町は、但馬地域の行政、金融、商業の中心地としてふさわしい近代都市をめざし、1921 年(大正 10 年)から「大豊岡構想」を掲げ、円山川の改修と耕地整理、公共建築の改修などに取りかかっていた。道路幅を広げて格子状道路とし、豊岡駅から堀川橋の間には斜線道路(寿通り)を設け、その中央をロータリーにした。これはパリのエトワール広場を模したとも言われている。

城崎町は現在のような観光を主体とした温泉地ではなく、湯治を主体とした小さな宿屋が 100 件以上営業を行っていた。道路は駅前通りで幅 3 間(約 5.5m)、まちの中央近くにある一の湯から上流ではわずか 1 間半(約 2.7m)しかなかったため、向かいの軒先が重なるような状態だった。また、まちの中央を流れる大谿川は川幅が狭く道路との落差が 1m もなかったため、少しの出水でも温泉街が水浸しになっているというありさまだった。

§ 2. 震災による被害

1925 年(大正 14 年)5 月 23 日午前 11 時 9 分 57 秒、円山川河口付近を震源とするマグニチュード 6.8 の直下型地震が発生した。被害が甚大だったのは震源地に最も近い港村津居山。総戸数 250 戸のうち 145 戸が焼失、105 戸が全半壊という壊滅的な被害を受けた。田結は 83 戸中 82 戸が倒壊したが、村民が住民の救助よりも先に消火に努めたため延焼がなかったという。

豊岡町では地震の揺れによる被害よりも火災による被害が大きかった。総戸数 2,178 戸のうち、半数近い 1,000 戸が全半焼している。駅から東に延びる大開通と、それと交わる円山川に沿った北側一帯の建物が密集していた地域が焼失してしまった。

城崎町は 702 戸中、548 戸が全焼し、人口 3,410 人に対し、7.65%に当たる 261 人もの死者を出した。その中には宿泊客 60 人が含まれる。昼前だったため、宿の一階台所で昼食の準備をしていた女性が家屋倒壊によって圧死したほか、逃げ遅れて猛火の犠牲者になった。女性の犠牲者は、死者の 7 割にのぼっている。狭小な谷あいには軒を連ねるように建ち並んでいた

温泉街は、数軒を除いてほぼ壊滅してしまった。

§ 3. 震災からの復興

豊岡町は、「大豊岡構想」を行政主導でさらに押し進めた。豊岡駅から東に延びる大開通をさらに広げ、その中央に鉄筋コンクリート造りの町役場、警察署、郵便局、税務署、消防署(これのみ木造)を集中させてシビックセンター(中央官庁街)とした。

また、県では、震災後に発生した火災を教訓に一般住宅にも防火帯の役割をもたせるため、防火耐震家屋建築に対する補助制度を創設した。当時、木造家屋を建てるのは坪 50 円程だったが、コンクリート造りだとその倍の 100 円が必要であった。そのため、坪 50 円を補助して鉄筋コンクリート造り建物を建てさせようとするものであった。この補助を受けるには、強度計算書や配筋図を始めとする設計図の提出や、大正 15 年度内に願い出ることなどいくつかの条件を守らなければならなかったが、豊岡町では 48 件の申請があったという。

城崎町では、まず町民会議を開き、震災で焼失した区域を中心に安全な温泉街とするため、地主から所有地の一割の無償提供を受け、道路を倍に広げた。それまで毎年のように大谿川の溢水に悩まされていたため、温泉地全体に盛土を施し、川護岸には同じく震災で崩れた玄武洞の玄武岩を運んで積み上げた。さらに盛土の不足を補うため、川護岸の上に特殊堤(パラペット)を築き、河積確保のため弓形の橋を配した。

小学校と外湯(共同浴場)、町役場など公的施設を RC 造(鉄筋コンクリート造)で再建する一方、城崎らしい景観を形づくっている木造二階建、三階建の旅館や店舗はそのまま再建し、類焼を食い止める防火帯として、大谿川に直交した数カ所の通りに RC 造の建物が配置された。

§ 4. まとめに代えて

復興事業計画は兵庫県が主導して策定し、豊岡町は行政主導、城崎町では住民主導で事業がすすめられた。

豊岡町はそれまでの「大豊岡構想」にのっとり近

* 〒669-6101 豊岡市城崎町湯島 655
電子メール: takayo_matsui @ me.com

代化を進めていったが、当初の案が一部の地主の強硬な反対に遭い、また地震後には住民との対立がさらに強まり、道路計画を中止、縮小させ、災害で被害を受けた地域の区画整理ができないまま、事業を終了した。

城崎町は町民会議で、外湯(共同浴場)をそれまでの場所のまま再建するという方針が掲げられた。町の形状に合わせて防火帯と防火建築群を適度に配置し、河川と道路幅員の拡張など、区画整理事業の断行も同時に行ったため、住宅復旧が遅れてしまった。

それぞれの町が持つ事情や当時の社会情勢、政治情勢などによって震災復興の進め方が全く異なっていたことが、対比することによってより鮮明となった。

文 献

- 兵庫県, 1926, 『北但震災誌』
豊岡町役場, 1942, 『乙丑震災誌』
西村天来, 1936, 『豊岡復興史』